

(十九) アナフィラキシー

女房が書斎にこもって仕事をしていると、蛙の合唱が始まった。窓の外を見ると、いつのまにか静かに雨が降り始めている。

反対に雨の降り終わりは鳥たちが知らせてくれる。雨に降りこめられて我慢していた鳥たちが、一斉におしゃべりを始めるのだろう。3日続きの雨があがった朝は、犬の散歩に出ると左右の林でいろいろな鳥がそれまでにないほど声高に合唱し、女房は一句ひねった。

雨上がり 雲雀（ひばり）鶯（うぐいす）ほととぎす

ウーン、五七五にはなっているが、事実を羅列しただけだ。いい句なら鳴き声が聞こえてくる感じがする筈なのに、まるで聞こえてこない。

どうも女房に俳句の才能はなさそうである。

年によって、よく鳴く鳥、今ひとつ鳴き声を聞かない鳥がある。

山羊を飼い始めて3年目だったか、不如帰（ほととぎす）がやけによく鳴いた。

ほととぎすは百人一首にも「ほととぎす 鳴きつるかたを眺むれば ただ有明の月ぞ残れる」と詠（よ）まれ、平安朝の貴族には人気のある鳥であつたらしい。が、夫婦が感じるころでは、鳴き声そのものはけたたましく、ちよいと優雅さに欠ける。なぜ人気があつたんだろう、といぶかると、昔かたぎで古典の素養のある女房の父親が「初夏到来の象徴ではないか」と言う。

確かに2週間ほどよく鳴いたが、暑くなるにつれてパタリと聞かなくなった。

蛙と鳥がよく鳴くのは春から夏にかけてで、秋になると蛙も鳥も静かになる。代わってにぎやかなのは虫。特に夜は家全体がリンリーンという美しい音に包まれ、夫婦は幸せな気分になる。

犬の散歩に広い芝畑を歩くと、8月は薄青い塩辛トンボがスイスイと飛び、下旬にな

ると赤くなる前の赤トンボ（アキアカネ）が増える。亭主の肩先や女房の特大の麦わら帽にまで止まるのが愛らしい。

そして大量の地蜂（じばち）。かなりの大きさに女房はちょっとギョッとするが、襲われたことはない。芝畑の地面に、人の親指ほどの穴が点々と開いているから、そこから出てきたのか、夜はそこで寝るのか。

田舎では蜂は珍しくない。雀蜂（すずめばち）だってブーンと大きな音を立てて飛んでいるが、こっちから手を出さない限り、そんなに攻撃してくるものではない。

しかし、時には刺されることがある。この夏夫婦は犬のダニ取りにかまけてつつい草取りを怠り、花壇が草茫茫（ぼうぼう）になった。女房はまた一句ひねった。

草の海 底に眠れる花壇かな

これはなかなかいいんじゃない？ どう？

俳句はともかく、たまりかねた亭主が思い切って日曜に草を引いていたところ、草に埋もれたミニ薔薇の枝に蜂が巣をつくっていた。気づかなかったのが亭主の不運、蜂は襲われたと思って反撃し、亭主は半袖半パンのむき出しの手足を6カ所、アッという間に刺された。生き物に詳しい亭主の鑑別では、小足長蜂（こあしながばち）。

亭主の叫び声に驚いた女房は、「とりあえずシャワーを浴びたら」と勧めた。その後ソファに座っている亭主の様子が、なんとも言えずおかしい。ボーッとしている。

「あんた、どう？」

「息、が、しに、くい……」

これはヤバイ、と女房はすぐ電話をかけて、25分ほど離れた救急病院が開いているのを確かめ、車を出した。この田舎では救急車を呼ぶより自分で車を走らせるほうが早いのだ。運転席から横目で眺めると、亭主、常になくボーとしたままである。病院につくと、アナフィラキシーだと言われた。中枢神経に毒が回り、呼吸困難をおこしていたのだ。ゾツとしたが、2時間ほど点滴を受けてよくなれば帰宅可能、よくならなければ一晩泊まることになると言われた。

幸い、4時間ほどでよくなった。

その後、もっとアブナイ話を聞いた。

近所の縦も横もデカイ亭主が、夜中の2時ごろ、ウワッと声をあげ、「百足（ムカデ）に頸動脈を刺された！」と飛び起きたという。その女房、半信半疑でこれもすぐ車を出した。車の中で亭主はしだいに呼吸が苦しくなり、病院に着いた時には目の前が真っ暗、つまり目が見えなくなっていたという。

「あんた、もうこれは死ぬんじゃないかって思ったんじゃない？」と後で本人に聞くと

「思ったねえ」

「よかったねえ、死ななくて」

「ホントだよ。百足に刺されて死ぬなんて冗談じゃない」

そこの女房が言うには、病院で夜明けが近づいたので「一度亭主を置いて帰って子どもたちの朝食の支度をしてきます」と告げたら、「困ります、気管切開するかもしれない。家族の許可が要ります」と言われた。彼女は平然と「何でもしてください、お任せします」と家に帰った。

すると台所で室内犬が座りこんで、デカイ百足とニラメッコしていた。即、彼女はビール瓶の底で粉々に叩きつぶした。

斜め向かいのこの女房、手八丁口八丁の有名なやり手である。

「葬式でき、ムカデに刺されて死にました、なんて言ってもたぶん誰も本気にしてくれないよねえ。『言いたくない理由がほかにあるんじゃない？ ホントは自殺なんじゃない？』なんて陰口叩かれるよね」

「あんたの旦那、まちがっても自殺するようなタマじゃないじゃん？」

「そりゃそうだけど。あの人はずごく丈夫でねえ、結婚して20年以上、医者にかかったことなんてなかったのよ。それが初めてかかったのがムカデだってさ、マッタク」

この話を都会のマンション暮らしの人に言うと、まず理解してもらえない。一軒家ではけっこう地面から虫が上がってくるものなのだが。そう言うと、「でもそれって、か

なりの田舎でしょ？」と聞き返される。

実のところ、田舎で家に上がってくるのは虫だけではない。

ある日、掃除嫌いの女房もたまにはトイレを掃除するか、とトイレブラシを持ち上げると、その下に小さな蛇が丸くなっていた。女房もさすがに「オー」と声をあげて一瞬固まり、いい理由になったと掃除は諦めて、そのままトイレブラシを蛇の上に戻した。

夕飯時にその話をすると、高校生の次女がイヤな顔をした。

「あたし、さっきトイレ行ったのよ。その時蛇、いたのね」

「いつからいたかわかんないよ。10日前からいたのかもしれない」

「ヤメテよ。ねえ、父さん、取ってよ」

「俺は知らないよ」。仕事からくたびれて帰っていいところに酒を飲んでいる亭主は、眠気も手伝って「我関せず」を決めこむ。

「じゃオレか」と大学生の次男が鼻をうごめかした。「じゃが、毒蛇じゃなからうなあ」

女房は毒蛇かどうか見分けがつかない。

「ねえ、あんた、何もしないでいいから、鑑別だけしてよ」と亭主をせっつく。亭主は「エエ？ めんどくさい。大丈夫だよ。ウン、ダーイジョーブ」と相手にしなかったが、拝み倒され、いやいやトイレへ向かった。そして、蛇を見るなり大声をあげた。

「蝮（まむし）じゃないかこれは！」

一瞬で酔いも眠気もふっとび、眼をランランと光らせた亭主は大股で土間へと火バサミを取りにいった。

「ちょっと待って。あたし蝮って知らないのよ、この際教えて」

「ほら、普通の蛇は胴体と頭が同じ大きさだけど、これは頭のほうが胴体より大きいだろう。これが蝮だよ。人によっちゃ頭が三角だって言う。こいつは毒がある」と言うなり亭主は火バサミで蝮をつまんで玄関から出、派手な音を立てて何度も蝮をタイルに叩きつけた。

「いったいどこから入ったんだろう？」

全員黙りこんだ。ド田舎とはいえ、家は新建材にアルミサッシの今風のつくりである。

「猫ちゃう？ 桃ちゃん。ほかに考えられないよ」

これに答えてそういえば、と次女が言う。「この間ここで朝ごはん食べてたら、家中でわたしに向かって鳩が一直線に飛んできたわ。あれには心底たまげた。桃ちゃんが捕まえてきたんだよね」

女房もその鳩はよく覚えている。2階で娘の絶叫を聞き、ドスドスと階段を鳴らして駆け降りると、細っこい娘が、もう一度鳩を狙（ねら）う猫を左足で押さえ、鳩をかばうため椅子を右足で押さえて、セーラー服の両足をおもいきり踏ん張っていた。

今まで猫が燕（つばめ）だの雀（すずめ）だのを捕まえてきたことは何度もあったが、鳩ほどの大物はなかった。

鳥だけではない。進学して家を出た長女の机の引き出しの下には、手足を非対称に伸ばした蛙（かえる）のミイラもいる。捨てるにはつまみ上げなければならず、「そんな恐ろしいこと」をするくらいなら、長女は蛙が「いないことにして」そのままほうっておいたのだ。

長女は鳥だの鼠（ねずみ）だの死骸を自分の部屋で見つかるたび、まず盛大に金切り声をあげ、次に猫をふん捕まえてものすごい勢いで説教を垂れていた。女房から見れば、猫にはその「説教」が「賞賛」と感じられ、長女に褒めて欲しくて毎回長女の部屋に獲物を置いていたのではないか、と思われるほどだった。

「しかし、よく桃は蝮に咬まれなかったな」と亭主が首をかしげる。

「そうだねえ。桃ちゃん、上手に蛇の頭の後ろでも咬んだんちゃう？ それにしてもなんでトイレ？」

「蝮のほうが涼しい物陰探して入りこんだんじゃない？」

話は尽きず、にぎやかな夏の晩であった。